

それらすべてのおかげで、私は子どもたちと、とりわけ精神病と自閉症の子どもたちと関わるようになりました。当時、心理学の資格はそれほど必要とされていませんでした。私はそれを持っていませんでしたが大丈夫でした。私の持っている哲学の修士号で、良しとしてくれました。それには条件があり、不安定なポストを受け入れるならば、ということでした。つまり私はそのポストの候補者ではなかったのです。でも興味があったのは臨床的な実践をする、ということだったので、受け入れました。そして心理学の博士論文の審査を 1986 年に通りました。それも興味があったので良かったと思っています。

私が探求したのは、精神病の発生についてで、ラカンのなかでどのように精神病の発生が考え始められたか、でした。そのことに大変興味があったのです。でも大学でポストを得ることが私にできるとは、考えられませんでした。というのはフランスの大学はラカン的なオリエンテーションをもつような人に対しては閉ざされているという考えを持っていたからで、それは完全には間違っていないとも思うのです。

私の指導教官はラカンに対して開かれた人でした。それでもラカン派ではなく、最初私にパリ 13 大学に行けと言いました。13 大学で講義を持つことになり、それからより上の講義のポストに応募しなさいと言われました。結局のところ、まあいいかと思って、トライしたのです。そうしたらナンテールのことだと思いますが、最初に応募してみました。でも駄目でした。ナンテールに戻りたいと思ったのですが。沢山の思い出があったので。

でも今になってみるとむしろナンテールで学んだことに満足しています。二度めにやったときは、5 個か 6 個、応募しましたが、ほとんどすべて受かりました。それはつまり面接は大丈夫でした。それからとくにボルドーのふたつのところへ行きました。彼らは電話をくれて、本当に私がボルドーに行くことを望んでいました。私はすごく驚きましたね。彼らはラカン派ではなかったのです。ヒステリー性狂気と言うあの本を読んで彼らはこう言ったのです。よくあることなのですよ。「あなたは理解あるラカン派でいらっしゃる。たぶん少しこの本ではシンプルすぎるひとですよ」と。驚きましたがとにかくドアを開いてくれました。そしてボルドーかレンヌかで迷ったのですが、選びました。ブルターニュが沢山の理由があって好きなものだから。それから後になり、私はブルターニュ（レンヌ）を選んだことをまったく後悔しませんでした。

インタビュアー) 大学との関係ではどうでしょうか？

大学との関係で？そうですね、レンヌでできたことが、ボルドーではできなかったでしょうね。多くの精神分析家は大学人を大学のディスクールに結び付けています。大学のディスクールの事を、ラカンは精神分析のディスクールの反対に位置づけました。しかし大学のディスクールは、避けられないものです。ひとが何かを注文するやいなや—たとえばフロイトやラカンの教育を注文するやいなや—、必ず大学のディスクールのなかにいるものです。

そしてたとえひとが大学の外において、介入を行うとしても、あるいは精神分析のひとつの学派のなかでひとが語るとしても、大学のディスクールにいるものなのです。精神分析家たちは非常に多くの場合大学のディスクールを保持していて、でも彼らはしばしば、知を好んでいません。だからひとが精神分析を実践するからといって、ひとが口を開くや否や、分析的なディスクールのなかにひとがいる、とは言えないのです。わりと多くの分析家たちがそう思う傾向があるようなのですが。

だから、厳密に言うと、分析のディスクールをそばで詳細に見てみるなら、それが分離の効果に狙いを定めているのが分かります。分析主体のなかに **S1** を生産することを目標にしています。それが治療においてもっぱら保持されるディスクールです。

それが分析のディスクールの解釈です。それは分析について語ることはありません。ラカン自身、セミナーにおいて、分析的なディスクールを保持していませんでした。彼はよくヒステリーのディスクールを保持していると説明していましたよ。というのは、彼は知の限界で、探求していたからです。私がこのことをちょっと思い出すのは、多くの分析家たちが自分たちのことを純粋な臨床家だと思っていて、大学人たちに対して非常に疑い深いからです。彼らは喜んで大学人たちを抽象的で防衛的な概念化にあまりにはまり込んでいると見做しています。臨床的にいって純粋な「聞くこと」に対してそれが障壁となっていると考えています。彼らのような自称純粋な臨床家たちは、「臨床的にいって純粋な聞くこと、それは存在しない」ということが思い起こされるとき、ときおり驚いています。

聞くこと、それはいつもいくらかの知によって、臨床的な知によって媒介されているものです。幻想によっても媒介されています。そして最良の場合であっても、彼らは逆転移を純化しようとしても、媒介は存在するものです。

ひとは他者に直接的関係をもつことは決してありません。あらゆる「聞くこと」に内在的なこの媒介性について精神分析家が経験を積んでいない場合、それについて理解しようとしなない場合は、この無知、あるいは「知らないこと」によって自ら騙されるがままになってしまう危険が非常にあります。

たとえば、ある日私はひとりの臨床家が「私は精神分裂症者を感じます」と言うのを聞きました。それで「でも精神分裂病の概念がなかったなら、あなたはどう感じたことでしょうかね？」と私は返答したのですが。この概念的な媒介が存在していますから。あなたは知ることが出来なかったのではないのでしょうか？

それからある種のひとたちはあたかもそういう概念的媒介が存在しないかのように考えたがります。それはよく見聞きすることですね。EFP（エコール・フロイディエンヌ・パリ）で少し支持されていたディスクールですらありましたよ。学派が分裂した時のことです。

片方に純粋な臨床家たちが存在し、もう片方には学者たちが存在します。後者にはとりわけあの恐ろし

い（笑）ジャック＝アラン・ミレールがいます。まあいいでしょう。それはよく耳にする分裂ですね。学生たちのなかでもあります。

私自身は純粋な臨床家ですけども、概念については、ひとがそれを望もうが望ままいが、そこに存在していますよ。それをもっと知るほうがよいし、そこで袋小路につきあたるよりも、それとともにやっっていくよう努めたほうがよいでしょうね。今日の若い臨床家たちは精神分析の歴史をあまり知らないです、分裂の歴史などもです。その水準では、いま彼らが自分をどう位置付けるのかはいっそう難しいことです。

まったく「分裂」というのはかなり込み入ったことです。自分自身はそれが起こったということはまあ話されたものです。しかしたぶん大事なのは、フロイト派の正統とラカン派のアプローチの違いを少し理解すること、とりわけ逆転移について違いを理解することでしょう。実践において違いが存在しますから、見定めておくことが大事です。

そして「ボーダーライン」についても違いがあります。前者では自己愛的な考えがある人たち、後者では普通精神病の人たちです。少しそれについても理解しておくべきでしょう。昔はそれらのことはもちろん、非常に稀でした。

インタビュアー）少し戻りますが、あなたはレンヌにやってきて、講義を担当したのですね？

マルヴァル）私は 1988 年に講師でしたね。

インタビュアー）でもあなたはつねにローランス・バタイユと分析を続けていたのですよね。つまり一方ではレンヌで講師をして、他方でパリで分析をしていた、と。

マルヴァル）分析は 1968 年に始めました。79 年に終わりにしました。というのはその後、1981 年まで素晴らしいコントロールを再開したからです。そこでも私は言いたいことがあるのですが、この大学のディスクールについて、です。純粋な臨床家とかについて。私は精神分析を実践しましたが、大学人となる前のことです。大学人になるまえに 12 年分析をしていました。

幾人かの同僚たちが私に言ってくるイメージとは反対に、私は精神分析を実践する大学人として、自分をイメージしませんでした。むしろ大学で働きながら、精神分析を実践する者だと思っていました。それは臨床心理学の教育のなかで、精神分析のシニフィアンを聞かせるという役目を負っている、というイメージです。でも私はいつも大学人だとか、教授として見られてましたね。大学で教えるよりまえに分析を受けていたと言うと、ひとに完全に驚かれたものです。

そして私は主に大学人である、とは思っていません。それは私の分析的実践から来ているものです。大学で分析について話すように促してくれましたが、私の考えはまったく大学人であることではありません。私はとてもよい学生というわけではありませんでした。いつか、あの教授との出会いまではまった

く大学人になるという考えはもっていませんでした。私の手段の外にあると思っていました。

インタビュアー) あなたの考えは、それでもやはり書いたりたぶん伝達できるだろうというものだったのでしょね?

マルヴァル) そうです。非常に早くから書くという考えはありましたよ。たぶん 17 歳とかそれくらいかな、施設に自分はいて、そこに精神病者がいました。私はそこで小さな部屋にいて、精神病者が教えてくれたことについて勉強していました。私はちょっとそんな幻想をもっていて、勉強したり書いたりしていました。

そうですね。まあちょっとある種のやり方で実現させたのでしょう。確かに、書くということ、それは私の症状です。それを私はさきほどラカンの解釈と一緒に喚起したでしょう。エクリチュール (書くこと)、それは根本的に私の享楽のモードですね。・ ・

だから私はボルドーでなくレンヌを選びましたが、それは大きなチャンスでした。当時私は科学的な心理学をまったく知りませんでしたが、ボルドーではそれが支配的でしたし、どんどんそういう傾向が強まっていましたから。ボルドーは教育においてその学問がもっとも目立つような、そういう場のひとつです。だからその学部で精神分析を導入しようとするのはとても難しかったです。

レンヌのほうは、レンヌ第 2 大学のことです。あそこはフランスでは同じものは見れないと思いました。アプリオリに精神分析にそれほど開かれていませんでした。しかし、とは言っても有利だったとは思いますが、少しは。レンヌ 2 とかトゥルーズ第 2 大学は、ストライキがあるときは、率先してやっていたね。

レンヌ第 2 大学には、68 年の人たちにとってたくさんのポストがあったのです。精神分析は賛成ではなかったですが、彼らは反対もしていませんでした。まあよいのではないのでしょうか。色々なものがあって、認知行動的なものもありましたが、ですからボルドーよりもっと有利な状況でした。幸いなことです。というのはここでできたことがボルドーではできなかったでしょうから。1988 年にレンヌに着いたときは、ひとつも精神分析を教える教師候補生もいませんでした。

26 年間そこで教えて出る時は、15 人になっていましたよ。5 人の教授がいました。忍耐強く、各々が自分の卵を置かなければなりませんでしたが (笑)、それも大変なことがないわけではありませんでした。認知行動の同僚たちと同盟を結んだりしながらです。彼らはいつも、いまでも学部では多数派ですからね。

そうやって花を開かせるためには各々が卵を置く必要があり、大学には 15 人くらいの精神分析家がいきました。でも行動療法のほうには 60 人ほどメンバーがいました。だから私たちはつねに少数派でした。つねに新しい教育、新しいポストを得るための戦いがありました。

今日は精神分析のオリエンテーションをもつ臨床教育を導入することは、レンヌ第 2 大学では少し低調ですが、それでもやはり 10 名ほどの精神分析家たちの小さなグループが残り、かなり活発に動いています。90 年代からは精神分析のオリエンテーションをもつ臨床心理士たちが数 100 名、レンヌ第 2 大学では生まれました。

その人たちのなかに、数 10 名が分析家になっています。たとえば ACF のヴァル・ドゥ・ロワール・ブルターニュのグループが証明してくれます。フランスで一番多いです。レンヌ第 2 大学の臨床家たちで分析家になったひとは多いです。私が講演に呼ばれるときにフランスの至る所でその人たちに会いますよ。また南アメリカにもたくさんいますね。でも実際、いろんな場所で昔の学生たちに会います。

私は精神分析の拡大のために自分の活動の大部分を捧げてきました。とくに大学に広げていくことに捧げました。でも同時にレンヌでの臨床部門、CPCT（分析的治療を期間限定で無料で受けられる機関）の創設、いくつかの施設での臨床提示の組織化にも捧げてきました。すべては大事なことがらで、だからこそ言及しています。

また、私はジャック＝アラン・ミレールと 2000 年代はじめの行動にも参加しました。法案の修正案が出てきて、それは精神分析の実践を妨げにくるようなものだったので、心理療法についてフランスの法律が変更されないために行動しました。私たちが唯一頑張ったというわけではありませんが、でもまあ、ミレールはやはりかなり重要な行動をとりましたね。私の著作である「権威的なサイコセラピーの驚くべき神秘化」は、そのアコイエ修正法案の機会に書いたパンフレットを発展させたものです。

その本では心理学の免状を持つからと言って、それが逸脱的な実践にたいして何も保証にはならないことを示しました。例えば地球外生物による連れ去りについて信頼することや、引き出される思い出の色々なかたち、とりわけアメリカで起こった伝染病なものについて、高等な免状を持つ実践家こそが生み出したということを示しました。ですから、免状は、この場合本質的なことではありません。

インタビュアー) そのためにひとはあなたのもとにやって来たのですか？

マルヴァル) あのアコイエ修正法案の機会に私は小さなテキストを書いていたのです。私たちは何人かで戦っていました。いろんなことをしました。ジャック＝アラン・ミレールが当時出した雑誌もあります。彼はそれにみんなが記事を書くように誘っていました。私もまさにそれについて書いたのです。そして彼に「どうしてその記事をもっと発展させて本にしないのか」と言われたのです。そんなふうにして書き上げたのです。自分の書いた本のなかで、唯一、精神病とか自閉症を扱っていない本になりました。

でもそれもまた私の興味範囲でした。その本ではサイコセラピー（心理療法、精神療法）と精神分析の違いを扱っています。サイコセラピーはつねに「暗示すること」へとつながっているものです。それはまったくもって適切だと思われます。精神分析とはまさに暗示とは別のものです。多くの人にとって

そのことがあまり明確ではないのですが。

以上があなたの最初の質問にたいする私が言うべきこと、となります。（3につづく）